

富士宮市文化財調査報告書 第21集

月の輪遺跡群 V

—月の輪上遺跡（C地区）—

1996

富士宮市教育委員会

I. はじめに

月の輪遺跡群は、月の輪平遺跡、月の輪上遺跡、月の輪下遺跡などの潤井川と古潤井川が分岐する一帯から古潤井川（星山谷）にかけて分布する遺跡群の総称であり、発達した古潤井川の河岸段丘上にその多くが立地している。今回の調査は、月の輪上遺跡を対象としたもので、富士宮市立黒田小学校周辺を便宜的にそのC地区と呼称している部分に相当する。調査は、月の輪上遺跡C地区の第2次目の調査に当たり、黒田小学校の学校施設建設に伴い1981年に実施された第1次調査の調査区南約30mの地点で実施した。

環境と遺跡（第1表、第1図）

月の輪上遺跡(1)は、富士宮市の南側を南北に展開する星山丘陵の中央に位置し、約125,000m²の広さに亘って遺物の分布が認められる有力な遺跡で、その東側を広大な星山谷が画することにより、東側から南側にかけて地形的な断絶が著しいため、そちら側への閉鎖性が強い遺跡である。

星山丘陵は、重層構造を示す富士山の構造要素のひとつであり、最も広範囲の広がりが確認されている古富士火山の集塊質泥流をその基盤としており、富士山の最も端部に展開する丘陵で、富士宮市域では比較的安定した広い平坦地が各所にみられる丘陵である。また、ここは市域を南北に縱走する大宮断層（潤井川）により富士山西南麓斜面と大きく分断されることにより、富士山の縁辺を弧状に走る独特の丘陵地形を示し、さらに、丘陵内は古富士火山に伴う放射状の谷により分断され、4ヶ所程の独立した丘陵が認められる。それぞれの丘陵は、潤井川に向かって緩やかに傾斜する斜面やこの川の河岸段丘に多くの遺跡を抱えており、潤井川の支流である弓沢川の東側に展開する富士根地区的遺跡群とともに2大遺跡密集地のひとつを作り出している。この区域には、縄文時代の継続的な造営が確認されている滝戸遺跡(11)や古墳時代前期の三連甕形土器が発見されている野中向原遺跡(10)、前述の月の輪平遺跡(2)、月の輪下遺跡(3)と本遺跡からなる月の輪遺跡群などが占有している。とくに、これらの中で滝戸遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓も調査されており、本遺跡の弥生時代後期集落ともども弥生時代後期にこの一帯が極めて有力な地域であったことを示している。

弥生時代以降の遺跡は、潤井川に直接依存した立地条件のもとで、それぞれの分布を示すが、縄文時代では各段階でやや多様な展開を示し、状況は複雑である。早創期から晩期まで時代区分されている中で、特に、縄文時代早期は、星山丘陵の西側を画する富士川に沿った川を見下ろす丘陵上に小松原A遺跡、沼久保坂上遺跡(20)、外谷戸遺跡(21)が点在し、富士川左岸沿いに列状の分布が認められるほかに、この月の輪上遺跡周辺の丘陵内部にも黒田向林遺跡(8)や奥山地遺跡(24)などがあり、丘陵内への面的な広がりが窺われ、縄文時代でもひとつの盛行期を迎えていると捉えられる分布を示す。また、これらの遺跡の中で小松原A遺跡、沼久保坂上遺跡や黒田向林遺跡などは、著名な若宮遺跡などと共に、縄文時代早期の主體あるいは単純遺跡で、当時の隆盛を考える上で欠くことのできない遺跡となっているばかりか、縄文時代早期が傑出した潤井川中流域を特徴づける遺跡ともいえる。

第1表 周辺遺跡一覧

番号	道 路 名	時 代	標高m	地 目	種 別	番号	道 路 名	時 代	標高m	地 目	種 別
1	月の輪上道路	縄文、弥生(後)、古墳(前)	1 2 5	宅 地	集 落	3 1	田中道路	弥生(後)	1 1 0	宅 地	散布地
2	月の輪平道跡	旧石器、縄文、古墳(前)	1 2 5	放水路	集 落	3 2	若の宮道路	古墳(前~後)、中世	1 4 0	宅 地	散布地
3	月の輪下道路	古墳(前)	1 1 0	放水路	集 落	3 3	大宮城跡	室町	1 3 0	宅 地	城 館
4	坊地南道路	古墳(前)	1 2 5	林	散布地	3 4	浅間大社道路	縄文(後)、古墳、中世、近世	1 2 0	境 内	散布地
5	南部谷戸道路	旧石器、縄文、古墳(前)	1 1 3	宅 地	集 落	3 5	川坂道路	奈良~平安	8 0	山 林	古 墓
6	五反田道路	縄文(中)、古墳(前)	1 1 3	宅 地	散布地	3 6	堀堤道路	縄文(中)、古墳(前)、古墳	9 5	宅 地	集 落
7	坊地南道路	縄文(早・中)、古墳(前)	1 3 5	宅 地	散布地	3 7	上宿酒路	縄文(早・中)、古墳	1 0 5	田 畑	散布地
8	黒田向林道路	縄文(早)	1 5 5	宅 地	集 落	3 8	森園道路	弥生(後)、古墳(前)	1 1 4	宅 地	散布地
9	野中中村道路	縄文(中)、古墳(前)	1 2 7	宅 地	散布地	3 9	石敷道路	古墳(前)	1 1 0	田 畑	散布地
1 0	野中向原道路	縄文(中・後)、古墳(前)	1 4 0	宅 地	散布地	4 0	中ノ土手道路	縄文(前)、古墳(前)	1 2 8	宅 地	散布地
1 1	池戸道路	縄文(中・後)~古墳(前)	1 3 0	中学校	集・祭	4 1	向田道路	古墳(前)	1 1 5	宅 地	散布地
1 2	羽衣町道路	弥生(後)、古墳(前)	1 1 5	工 場	散布地	4 2	虚空蔵社古墳	古墳(前)	1 1 4	原 野	古 墓
1 3	西町道路	弥生(後)、古墳(前)	1 2 0	宅 地	散布地	4 3	上石敷道路	旧石器、縄文、古墳(前)	1 2 0	田 畑	古 墓
1 4	泉道路	縄文(後)、御室(後)、古墳、平安	1 2 5	宅 地	散布地	4 4	中沢道路	古墳(後)、奈良	1 2 0	田 畑	散布地
1 5	甲石道路	縄文(中・後)、古墳	1 3 0	宅 地	散布地	4 5	小坂中村道路	縄文(後)、古墳(前)	1 4 0	田 畑	散布地
1 6	福伝道路	縄文(後)、古墳	1 3 0	宅 地	散布地	4 6	木ノ行寺道路	縄文(中)、古墳(後)、奈良	1 4 0	高 校	散布地
1 7	大中里坂下道路	縄文(中・後)、古墳	1 3 0	田 畑	散布地	4 7	寺 内道路	縄文(前・中)、古墳	1 5 0	田 畑	散布地
1 8	上ノ原道路	縄文(中)、古墳(前)	1 7 2	田 畑	散布地	4 8	寺 内山ノ神古墳	古墳(後)	1 4 3	原 野	古 墓
1 9	谷外道路	縄文(中・後)、古墳	7 0	田 畑	散布地	4 9	寺ノ後道路	縄文(中)	1 7 0	田 畑	散布地
2 0	沼久保坂上道路	旧石器、縄文	8 0	林	集 落	5 0	神相道路	縄文(早・中)、古墳	1 6 8	田 畑	散布地
2 1	外谷戸道路	先土器~縄文(早)	9 3	田 畑	散布地	5 1	三ツ室道路	縄文(前)、古墳	1 5 5	田 畑	散布地
2 2	倭文神社道路	縄文(早)、古墳(前)	9 7	境 内	散布地	5 2	神相山ノ神古墳	古墳(後)	1 6 4	宅 地	古 墓
2 3	明星山道路	縄文(中)	1 7 3	田 畑	散布地	5 3	大室古墳	古墳(後)	1 7 6	田 畑	古 墓
2 4	奥山地道路	縄文(早・中)、古墳	1 3 3	田 畑	散布地	5 4	大室道路	縄文(中・後)、古墳	1 7 0	田 畑	散布地
2 5	高原城跡	中世	1 7 0	山 林	城 館	5 5	丸ヶ谷戸道路	縄文(中・後)、古墳(前)	1 7 5	田 畑	散布地
2 6	上高原道路	縄文(中)	1 3 2	田 畑	散布地	5 6	茅石道路	縄文(後~後)、古墳、奈良	1 8 2	田 畑	散布地
2 7	出口道路	縄文(中)、古墳(前)	1 2 2	田 畑	散布地	5 7	時田道路	縄文(中・後)、古墳	1 9 2	田 畑	散布地
2 8	吉野羅敷	中・近世	7 5	宅 地	城 館	5 8	辰野道路	萬葉(中)、御室(後)、古墳	2 0 5	田 畑	散布地
2 9	下ヶ谷戸道路	弥生(後)~古墳(前)	1 0 3	田 畑	散布地	5 9	宝田道路	縄文(中・後)、古墳、中世	2 1 0	田 畑	散布地
3 0	杉林道路	弥生(後)~古墳(前)	1 0 0	田 畑	散布地						

目 次

I.	はじめに.....	1
	環境と遺跡.....	1
	調査の経緯.....	4
	層序と調査の経過.....	4
	過去の調査歴.....	5
II.	遺構と遺物.....	8
	遺構.....	8
	溝1.....	8
	溝2.....	9
	遺物.....	11
	縄文時代.....	11
	弥生時代.....	13
	遺物出土状況.....	14
III.	まとめ.....	16

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	2
-----	--------------	---

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図.....	3
第2図	月の輪遺跡群調査地点.....	6
第3図	調査全体図.....	7
第4図	溝1実測図.....	8
第5図	溝2実測図.....	9
第6図	出土遺物①.....	12
第7図	出土遺物②.....	13
第8図	縄文時代遺物出土状況図.....	15
第9図	月の輪上遺跡環濠展開図.....	16
第10図	弥生時代後期後半壺の変遷.....	16

写真図版目次

写真1	溝1	9
写真2	溝2 平面・土層・土器出土状況・出土土器.....	10
写真3	出土遺物.....	12
写真4	縄文時代調査区（北側調査区）.....	14

例　　言

1. 本書は、静岡県富士宮市星山字月ノ輪に所在する「月の輪上遺跡」－C地区－第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宅地造成工事に伴うもので、富士市永田町67番地の14 第一建設株式会社より調査依頼を受けて富士宮市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は平成7年7月18日から同年8月11日である。
4. 発掘調査は富士宮市教育委員会文化課学芸員馬飼野行雄、同渡井英譽を調査担当者として実施した。
5. 写真撮影は馬飼野、渡井が行った。
6. 本書の執筆、編集は渡井が担当した。
7. 地形図、遺構実測図に記す高度は、全て海拔高度をもって示している。
8. 第1図、第2図、第3図、第9図の地図は（承認番号）昭62・部公第3154号によって建設省国土地理院長の承認および助言を得て、富士宮市役所が調整した富士宮市都市計画図を使用している。
9. 土器観察に記す色調は、土器の最も広い範囲を専有する色合いを原則として取り上げている。色調の観察は、『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）で補って判断している。
10. 発掘調査および本書発刊に関する事務は富士宮市教育委員会文化課文化財係が担当した。
11. 本報告による出土品および記録図面、写真などは、富士宮市教育委員会で保管している。
12. 調査体制は以下の通りである。

調査主体者 富士宮市教育委員会教育長 藤井 國利

調査担当 富士宮市教育委員会学芸員 馬飼野行雄

富士宮市教育委員会学芸員 渡井 英譽

現場作業員 天野一作、天野秀男、太田川忠雄、勝俣利雄、望月秀雄、

石井ちかえ、大平美奈子、勝俣秀子、望月香、山崎美美子

整理作業員 渡辺麻里、望月利恵



第1図 周辺遺跡分布図

月の輪上遺跡は、その北半分がこれまでの考古学的な調査で、縄文時代早期と弥生時代後期後半～古墳時代前期に顕著な生活の跡が窺える遺跡として把握されている（富士宮市教育委員会1993）。前述のように、星山丘陵は富士川沿いからその内部にかけて縄文時代早期が、また潤井川沿いに弥生時代後期～古墳時代前期がそれぞれ特徴的な遺跡の分布を示す地域として捉えられるが、月の輪上遺跡はその両方の性格を的確に反映している遺跡として潤井川沿いの比較的丘陵内部に立地する遺跡と言える。

調査の経緯

月の輪上遺跡は、A、B、Cの3地点に対して、1977年の1回目を皮切りに6次に亘る本格的な発掘調査が実施されている。今回の調査は、月の輪上遺跡C地区の第2次目の調査に当たり、弥生時代後期の集落が確認されているB地区と、環濠の一部と考えられる溝が確認されているC地区とのちょうど中間部分に当たる（第2図）。

発掘調査は、第一建設株式会社が計画する富士宮市立黒田小学校南側一帯の標高137mを測る小高い丘陵6,614m²に対する宅地造成工事に伴う事前調査として実施した。開発対象地は、周知の月の輪上遺跡（富士宮市遺跡番号No.112）内に含まれるため、開発側の第一建設株式会社と富士宮市教育委員会との間で、埋蔵文化財を主とした文化財に対しての取り扱いについて協議が持たれ、原則的に遺跡を記録保存する方針で、その開発事業に対処することになった。

開発対象地に対しては、1994年12月19日、20日にかけて行った試掘調査の結果や過去の調査資料などから、丘の北側斜面からその袖部にかけての140m²ほどの範囲に偏在する状況で遺物、遺構が分布しているものと予測されたため、翌1995年7月18日～8月11日に同地点に対する本格的な調査を実施した。

層序と調査の経過

発掘調査区は、南北に細長い140.4m²の広さを測るが、幅8mほどを測る東西方向で比高差150cmを持ち、西側に向かって低くなる斜面部に当たるため、視覚的には実際よりやや広い斜面地といった感じを受ける。

また、この調査地点の標高の低い北端部と南端部以外では後述する大沢ラビリ層下で、星山丘陵の基盤となる古富士火山噴出の集塊質泥流の露呈部分が顕著に認められるため、縄文時代の遺物包含層は、その大部分で存在しない。以下では、調査区の北壁で観察した土層の状況を解説するとともに各時代の基準となる土層での調査状況についてその概要を述べる。

第Ⅰ層 表土

第Ⅱ層 黒色土

やや軟質な層で、粒子も粗い。調査区の標高の低い西側で部分的にその分布が認められる。後述する溝1は、この層を削去することにより構築されている。

第Ⅲ層 棕色土（大沢ラビリ層）

その降下年代が約2,700年前とされる新富士火山の噴出物の層で、縄文時代晚期以降を規定

する鍵層となっている。緻密なスコリヤ層で堅固なマサ層（富士マサ）を作っており、乾燥すると白っぽく変色する特異な性質を示す。この層が本遺跡における弥生時代以降の遺構の確認面となる。

第Ⅲ層上面では5m区画のグリットを基準として調査を進めた。グリットは調査区に合わせて任意に設定し、東西列を西からA、B、Cとし、南北列を北から1、2、3…として、各区画の北西側交点の名称をもって呼称した。この部分の調査は、前半の重機による表土排除作業を含めてほぼ8日間を要した。

第Ⅳ層 黒褐色土

通称「黒ボク」とされる黒色の強い層。

第Ⅴ層 栗色土

新富士火山の噴出物で、比較的硬質で粘性の強い層。

第Ⅵ層 黒褐色土

富士黒土層に対応するが、第Ⅴ層の影響で純粹な富士黒土層より明るい。堆積年代がB.P6,000年～8,000年とされる層で、縄文時代早期～前期の包含層として捉えられる。

第Ⅶ層 黄褐色土

黄褐色ロームの漸移層。

第Ⅷ層 暗褐色土

白色スコリヤを含む粒子の粗い層で、大型の礫が目立つ疊層。古富士火山集塊泥流の上面に当たる。

縄文時代については、2m幅のトレンチを上記のグリットに合わせ任意に設定して、その遺物、遺構の検出に努めた。遺物などが確認されたトレンチに関しては、その周辺を第Ⅷ層あるいは第Ⅸ層まで掘り下げて、その広がりを追及した。この縄文時代に関する調査には、調査期間の後半10日間を費やしている。

現地の調査に引き続いだ、富士宮市教育委員会文化課の施設において、調査で得られた資料の整理作業を進め、平成8年3月29日付で本報告書を刊行して一連の事業を完了している。

過去の調査歴（第2図）

月の輪上遺跡に関する調査とそれに対する富士宮市教育委員会刊行の調査報告書は以下の通りである。

第1次調査 月の輪上遺跡A地区

＜調査期間＞ 1977年3月23日～4月6日

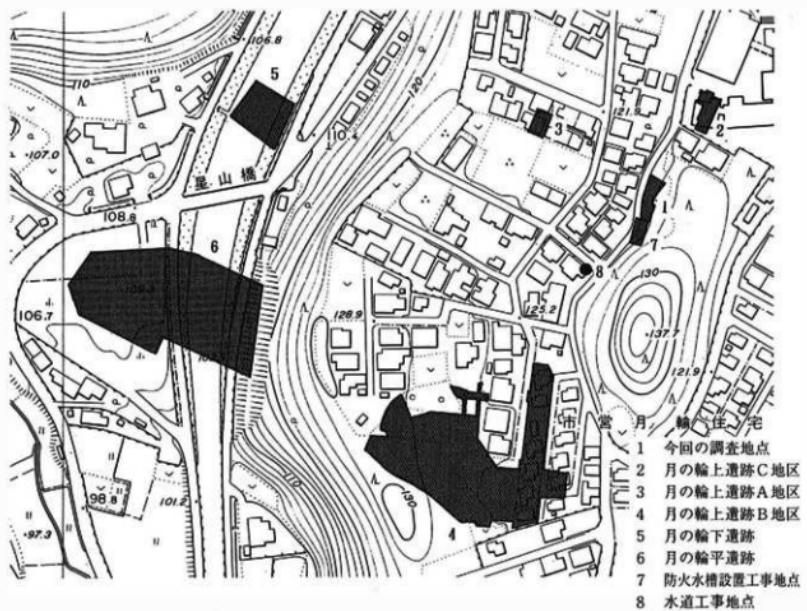
＜文献＞ 富士宮市文化財調査報告書第1集『月の輪遺跡群』昭和56年3月31日刊行

第2次調査 月の輪上遺跡B地区

＜調査期間＞ 1980年10月29日～12月27日

＜文献＞ 富士宮市文化財調査報告書第2集『月の輪遺跡群II』昭和56年3月31日刊行

第3次調査 月の輪上遺跡C地区



第2図 月の輪遺跡群 調査地点

<調査期間> 1981年9月1日～9月6日

<文 献> 富士宮市文化財調査報告書第4集『月の輪遺跡群Ⅲ』昭和57年3月31日刊行
第4次調査 月の輪上遺跡B地区

<調査期間> 1988年8月17日～8月31日

<文 献> 富士宮市文化財調査報告書第19集『月の輪遺跡群Ⅳ』平成6年6月30日刊行
第5次調査 月の輪上遺跡B地区

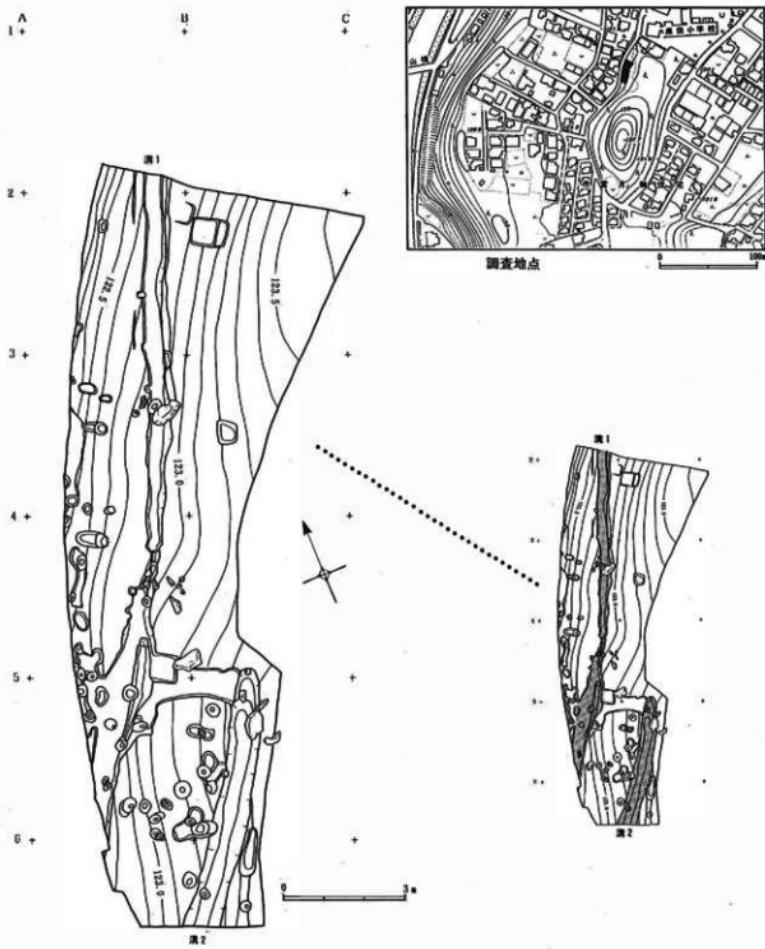
<調査期間> 1989年9月12日～12月4日

<文 献> 富士宮市文化財調査報告書第19集『月の輪遺跡群Ⅳ』平成6年6月30日刊行
第6次調査 月の輪上遺跡C地区

<調査期間> 1995年7月18日～8月11日

<文 献> 本調査報告書

これらの調査以外に月の輪上遺跡では、今回の調査地点に隣接する南側において施工された防火水槽設置工事に伴い事前の試掘調査が1987年12月7日に実施されている。



第3図 調査全体図

Ⅱ. 遺構と遺物

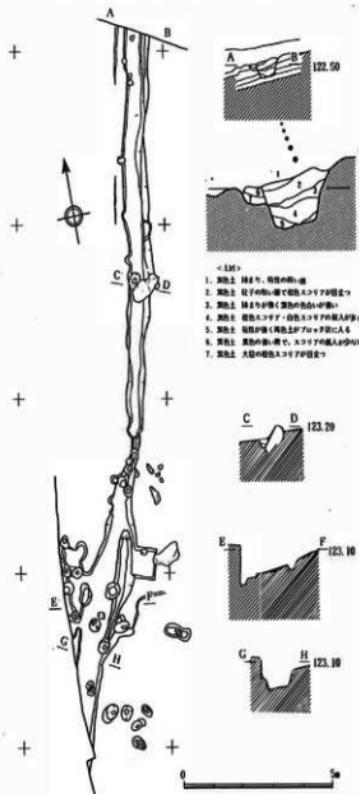
<遺構>

月の輪上遺跡C地区の第2次調査では、第Ⅲ層上面において弥生時代後期後半の溝と江戸時代以降に比定される溝がそれぞれ確認されている。また、溝以外に調査区の西壁際に土坑あるいはピット状の落ち込みがやや密集して認められたり、調査区の中央に点在して方形の土坑が位置しているが、それらの大半は、調査区の西側を走る道を敷設する際の造成の跡であったり、調査前まで行われていた畑作にともなうものであり、いづれも極最近のもので占められる。そのため、今回の調査では2つの溝とそれに伴う数基のピットがその対象となっている(第3図)。

なお、縄文時代は包含層が残存するものの、明確に遺構と判断できるものはなかった。

溝1 (第4図)

溝1は調査区内で西側へ緩やかに湾曲する溝で、長さ20m程度が検出されている。溝はほぼ平行する2条の溝が重複するもので、標高の高いA-1~4グリットでは深く掘り上げている新しい段階のものが明瞭に確認され、A-5グリットの調査区西壁際で、幅の広い古い段階のものが良い残りを示している。A-4からA-5グリットにかけて溝1の東側にやや深く掘り窪めている部分が認められるが、新しい段階の溝の残存部分として捉えることができる。このように溝1は、東側に新しい段階の溝が、そしてその西側に重複しながら平行して古い段階の溝が走っているものである。溝の規模は、調査区北壁での観察によると、新しい段階のものが幅78cm、深さ60cmを測り、古いものが深さ17cmを測る事が分かる。そしていづれも第Ⅱ層を掘り込んで構築されていることが観察された。古い段階の溝については、A-5グリットで残存状況の良い部分が認められが、そこでのデータによると幅88cm、深さ56cmの規模を持つ溝であることが理解される。また、溝底での比高差は、そのA-4グリット内の最も高い箇所と低い北端とでは70cmほどを測り、地形に沿う状態で、溝底は両端に向かって下がっている。



第4図 溝1実測図

溝1は、その中や周囲に、十数基のこの溝に類似する覆土を持つピットが点在するが、その配列を見る限りでは、溝との有機的な関係を示すものではないようである。

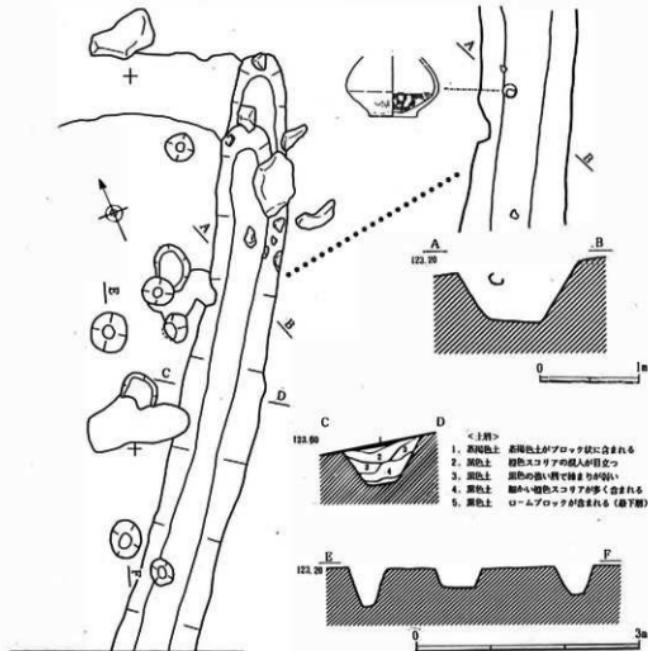
遺物は、18世紀前半代のものと思われる陶磁器の小破片が、溝の覆土から少量出土している。



写真1 溝1

溝2（第5図）

溝2は、A-6、B-5、B-6グリットにおいて確認され、調査区内で全長830cm、幅110cm、深さ65cmを測る。現代の畑地造成により、調査区の東端つまり調査区の位置する斜面地の中央が大きく削平されているため、溝は、調査区内でその北側が消失している。残存する部分での状況は、緩やかに集落のある西側へ湾曲している様子が窺えるとともに北側と南側とは、その溝底で比高差60cmを測り、南側が低くなっている。溝の断面形は集落のある西側の立ち上がりが急な変形の逆台形～「V」字形で、過去の調査で確認されている他の部分と同じ形態を示している。



第5図 溝2実測図



溝2 平面

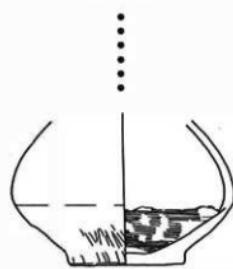


溝2 土層



溝2 土器出土状況

写真2 構2



溝2 出土土器

溝の覆土は、下位の4、5層が栗色土やロームのブロックを含み、板築状の堆積を示すのに對して、3層以上は橙色スコリヤの混入が目立つ各層がレンズ状に堆積している。

遺物は弥生時代後期後半の壺形土器の胴部下半が、溝の中央やや北寄りで検出されている。出土位置は溝底より35cmほど高い地点であるが、それはほぼ4層上面の位置に相当する。これは、溝がある程度埋まった段階あるいは埋められてから土器を廃棄している状況を表しており、月の輪上遺跡のB地区やC地区の第1次調査で検出された溝と同じ様相を示している。

溝の西側には、その覆土に溝の覆土に類似するスコリアを含む黒色土が多く認められるピットが8基ほどみられるが、溝との直接的な関係は分からぬ。

<遺物>

縄文時代（第6図）

縄文土器片は、全て早期後半の所産で、高山寺式土器に比定されるもの（1）と、それに伴う撚糸文の施されるもの（2～10）、擦痕、無文のもの、底部（11）、それと条痕文系土器（12）である。

1は、大振りの不明瞭な楕円文が施され、口縁部内面に斜行沈線が認められて、高山寺式土器の特徴を備えている。厚さ1.5cmで赤褐色、胎土は、纖維と、大粒の長石、石英が目立ち、粗くゴツゴツとした感じを受ける。

こうした胎土の特徴は、撚糸文の施される土器の2～9に共通し、2、3のように撚糸が乱走するものや、8、9のような網目状撚糸文が、高山寺式土器に判出することは、本遺跡より西へ尾根ひとつ隔てた黒田向林遺跡（注）で確認されている。

10は、撚糸文が交差して網目状効果をもつもので、胎土に金雲母、細砂が多量に含まれるため非常に脆弱で、4点の出土を見るが、形状を保ったものは、この1点に過ぎなかった。

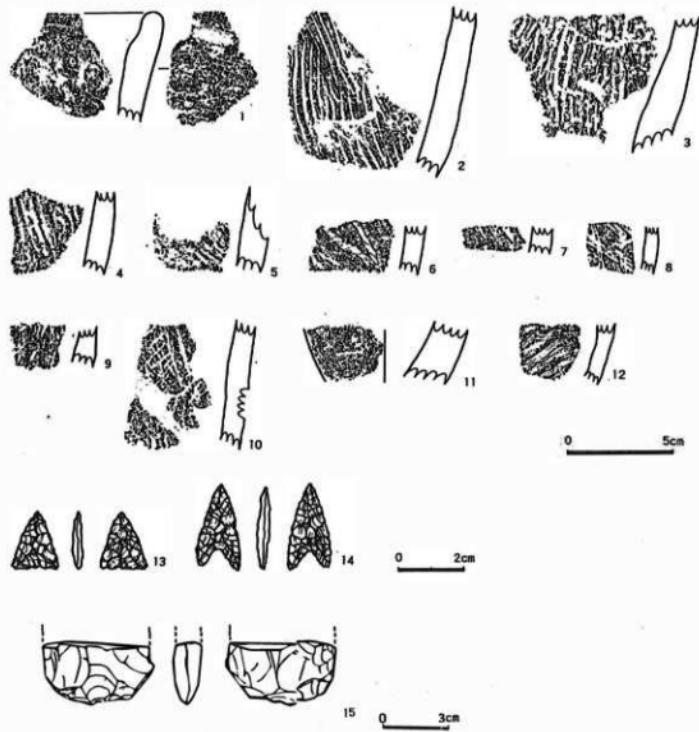
11は、底部付近の破片で厚さ2cmを測る。胎土に大粒の長石、石英が目立ち、「朝顔」形の尖底が予想される。

12は、0.7cmと薄手の条痕文系土器で黄褐色、胎土には少量の纖維と細砂粒が含まれる。やはり、前述の黒田向林遺跡に共伴例があり、高山寺式土器と田戸上層式土器の並行関係が確実視されるなか、関東地方の貝殻沈線文系土器群の影響下に作出されたものであろう。

石鏃（第6図-13、14）

13、14とも、黒曜石製の完形品である。13が平基式、14が凹基式で、両者とも両面より丁寧な周縁調整がなされて、断面も非常に薄い「レンズ」状となり、鋭利な感じを受ける。法量は1が長さ1.6cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm、重さ0.5g、2が長さ2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ0.85gである。

注. 馬飼野行雄 1986『黒田向林遺跡』富士宮市教育委員会



第6図 出土遺物①

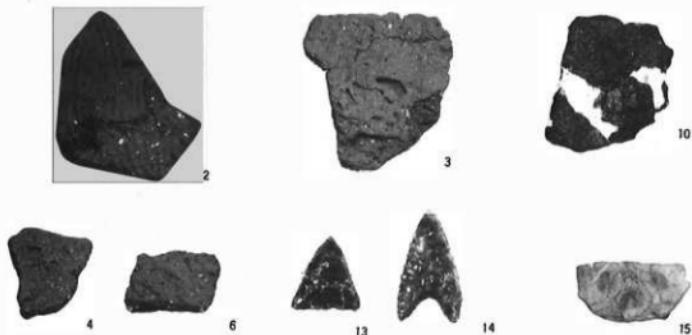
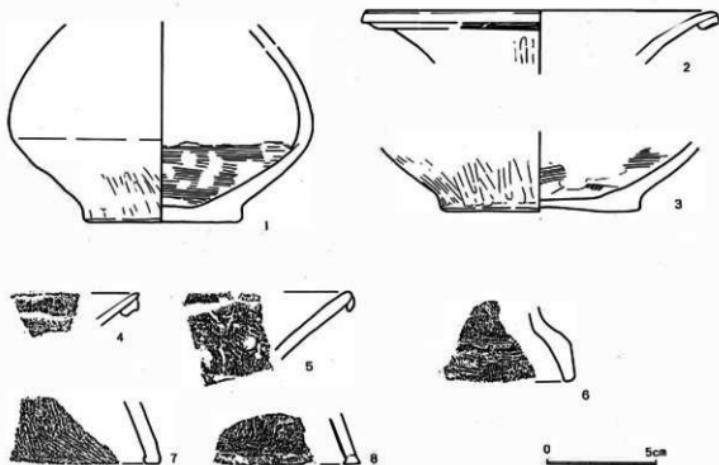


写真3 出土遺物



第7図 出土遺物②

弥生時代（第7図）

弥生時代の遺物は、全て土器で占められ、出土点数は57点とそれほど多くない。その土器の内訳は、壺あるいは鉢39点(68%)、甕18点(32%)で、その土器外面がヘラミガキにより整形されているものが圧倒的に多い。今回の調査地点は溝2およびその周辺として捉えられるが、これらが溝2以外の構造が存在しない区域から出土した土器群として、大半が小破片であるものの溝2に間接的にでも関連した器種構成を示すと考えられる。これは同じ性格を有する月の輪上遺跡B地区溝状遺構20出土の甕の比率41%やC地区溝状遺構01での甕の比率25%などの甕の比率と共通しており、集落を囲む環濠とみられる一連の溝への土器の廃棄が、壺（大半は壺であろう。）を中心として行われた行為であった実態が浮かび上がってくる。第7図に掲載の土器は、1、3、7、8が溝2の覆土中出土で、その他が遺構外出土のものである。

1、3は壺の底部である。1は胴部下半の全体の様子が知れる唯一の資料で、胴径14cm、底径7.3cm、残存高9cmを測る。その内面においてヨコハケメが顕著に残る底部と残らない胴部との整形の違いや両方の接合部分がよく分かる。2、4、5は、折り返し口縁壺の口縁部破片で、折り返し部の幅が広く、その断面が長方形になる2、4と形骸化した小さな折り返し部が付き口縁端部の面取りが不明瞭な5とが認められる。6は作りがやや粗雑で、その下位に頸部に展開すると思われる屈曲が認められる事から複合口縁の短頸壺になるか、反転して菊川様式系の高壺の脚台部になるものと考えられるが、小破片のため全体の型式は分からぬ。この型式はその類例をあまり見掛けない。7、8は、台付甕の脚台部破片である。

遺物出土状況（第8図）

縄文時代の遺物は、調査区の北側と南側にその包含層が認められ、その分布が調査区両側に偏在している。包含層は第VI層で、大半の遺物はこの層からの出土であるが、一部は第VII層からの出土も認められる。ただ、調査地点が斜面地で標準的な層序を示さないため、遺物の垂直位置など安定した出土位置を表しているとはいえない。

遺物は、調査区の中央の古富士火山集塊質泥流層が露呈する地形の張り出しに近いほどその分布が減り、張り出しの周囲を巡るように分布していると見て良いが、北側調査区のB-2杭付近にやや集中する部分があるとも捉えられる。その中で黒曜石は、A-5グリット東側中央に集中する部分が認められ、全体の分布状況からすると、やや異質な感じを受ける。土器では、1の高山寺式土器が北側のB-2杭付近で確認され、条痕文系土器の12が南側調査区の南側中央から出土している。その他は、撲糸文土器および擦痕、無文のものであるが、これらの中には胎土が非常に脆弱で極めて特徴的なものが3点含まれる。そのうち図示した10は、南側調査区南西隅で検出している。他の2点は1の資料と同じB-2杭付近で確認されており、大きくそれぞれの出土地点を違えている。

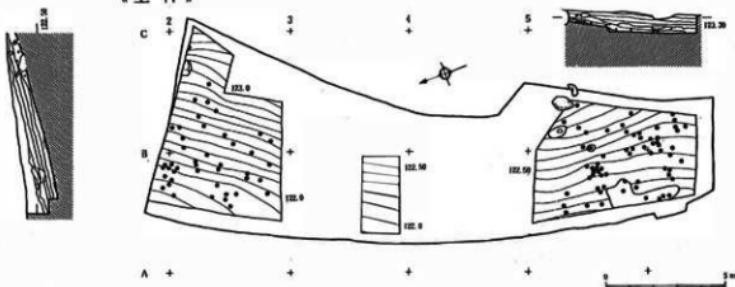
石器は、13の石鎌が南側調査区の南東隅で、14が北側調査区の北西隅のB-2杭付近で確認されている。15の頁岩製の石斧片が南側調査区北西隅で出土している。

これら遺物の分布に対応する遺構などは確認していないが、遺物の分布に関連しそうなものとして、南側調査区で浅いピット状の落ち込みが標高の高い調査区の北東側に2ヶ所見られる点やその西側にやや大きめの風倒木痕が広がっている点は注意しなければならない。特に、南側調査区西側の遺物がやや少ないので、風倒木の影響によるものであろう。

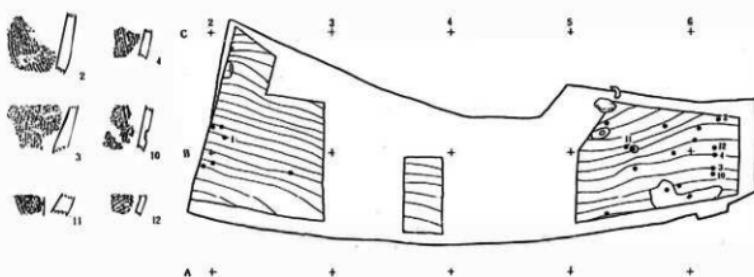


写真4 縄文時代調査区（北側調査区）

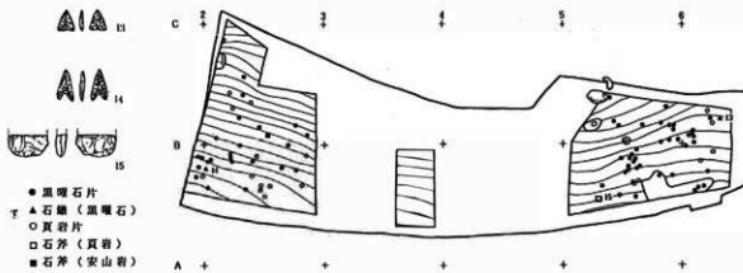
《全體》



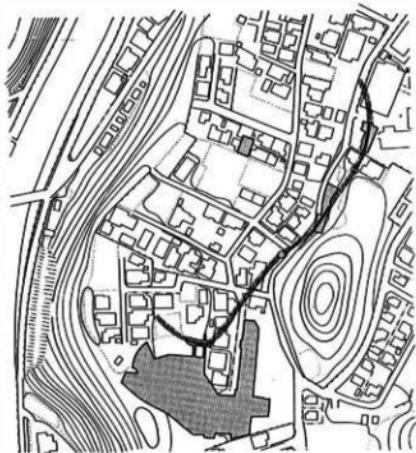
《土器》



《石器》



第8図 繩文時代遺物出土状況図



第9図 月の輪上遺跡環濠展開図

ら180mほど南に位置する月の輪上遺跡B地区では、屋敷地と目される中近世の掘立柱建物群が検出され、この月の輪地区で、この段階に積極的な土地利用が施行されている状況が確認されている。この状況を踏まえると、この溝もその一貫として敷設された可能性があり、屋敷の周囲に広がる畠地に対する根切り溝などの機能が想定されるものである。

弥生時代は、溝2の検出によって、星山谷側を開口させて月の輪地区に展開すると想定されている環濠の一部が確認され、より具体的な形として、それを理解できるようになった（第9図）。

環濠の内、今回調査している部分は、丘陵斜面部まで占地し、地形に沿って掘削して、溝が作られている。溝が緩やかな斜面に構築されている点は、外部の敵を防ぐにはやや不利で、集落の防御機能を想定すると、地形を巧みに利用しているとは言い難い。弥生時代後期後半に当地域では、環濠自体が形骸化し、集落を囲むだけのものになっていたようである。

弥生時代後期後半の壺は、第10図のような頸部の相対的な短縮化が進み、胴部から肩部にかけての張りが増すといった型式変化を辿り、漸移的に長胴から球胴を志向するようになる。今回検出されている壺胴下半の資料は、胴部最大径を計測する点から肩部にかけての張り具合より、飯田様式の3段階（渡井 1994）に相当するものと捉えられる型式であり、過去に環濠の他の地点から検出された土器群と形式的な齟齬を生じるものではなく、その同時性が指摘できるものである。

文献

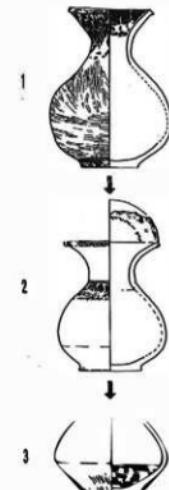
渡井英誉 1994 『月の輪遺跡群IV』富士宮市教育委員会

III. まとめ

今回の調査では、富士宮市立黒田小学校南側の小高い丘の西側斜面で、縄文時代早期、弥生時代後期後半、中近世と3時期に亘る造営が窺える遺跡の状況を確認した。

縄文時代は、過去の調査で採取された土器に新たな資料が加えられる事になり、縄文時代の遺跡が、面的な広がりを示す事を改めて確認した。ただ、今回の調査でも具体的な遺構は検出していない。星山丘陵における縄文時代遺構の確認は、今後の大きな課題となろう。

中近世は、1条の溝を確認している。遺物の出土がほとんど認められないため、詳しい年代は分からず。今回の調査地点か



第10図 弥生時代後期後半壺の変遷

報告書抄録

ふりがな	つきのわいせきぐん5
書名	月の輪遺跡群V
副書名	月の輪上遺跡（C地区）
卷次	
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書
シリーズ番号	第21集
編著者名	渡井 英誉
編集機関	富士宮市教育委員会
所在地	〒418 静岡県富士宮市弓沢町150 TEL0544-22-1111㈹
発行年月日	西暦 1996年3月29日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
月の輪上遺跡	富士宮市星山 字月ノ輪	富士宮市	市番号 112 22207	35° 12' 20"	138° 37' 43"	19950718~ 19950811	140.4	宅地造成 事業に伴う事前調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
月の輪上遺跡	集落跡	江戸時代 弥生時代後期 縄文時代早期	溝 1条 溝 1条 包含層	陶磁器・弥生土器 縄文土器・石器	月の輪上遺跡-C地区の第2次調査として実施された発掘調査で、弥生時代後期集落を、囲郭する溝の一部を確認。			

富士宮市文化財報告書 第21集

月の輪遺跡群V

—月の輪上遺跡（C地区）—

平成8年3月29日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418 静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22-1111㈹

印刷 (株) 緑星社